

白血病患者の日常生活に関する調査

—血液外来日誌による調査—

(分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究)

宮崎澄雄，吉田信之，古賀広幸

要約：10施設における外来通院中の白血病患者135例につき血液外来日誌による日常生活の調査を行った。調査時年齢は3歳から18歳までで平均8歳であった。就学児における1カ月平均の休学日数は急性リンパ性白血病（ALL）で2.2日、非リンパ性（ANLL）で12.9日であった。外来治療中の嘔吐は1カ月平均 ALLで3.2日，ANLLで6.6日であり，発熱は ALLで0.9日，ANLLで3.2日，発熱時の白血球数は1,000～3,000がもっとも多かった。学校体育への普通参加例は84%であった。

見出し語：白血病，日常生活，血液外来日誌，急性リンパ性白血病，非リンパ性白血病，休学，嘔吐，発熱，白血球数，学校体育

対象）昭和62年度の本研究班では小児白血病における長期生存例について日常生活の実態を調査した。今回は外来において治療中の白血病患者135例につき，家族および主治医に血液外来日誌（三重重大方式）を記載してもらった。その内容は外来における治療内容と患児の全身状態とくに発熱，嘔吐，休学の有無や白血球数などである。

調査期間は一定でなく，昭和62年1月から12月までが28例，62年11月から63年5月までが19例，62年11月から63年1月までが40例，63年3月から63年5月までが7例，63年9月から11月までが41例であった。

調査時年齢は3歳から18歳，平均8歳であり，

初診より調査開始までの期間は6カ月から6年5カ月，平均2年3カ月である。病型は ALL 98例（73%），ANLL 29例（21%），その他8例（6%）であり，就学児は89例（66%），未就学児46例（34%）であった。

成績）

1) 就学児の休学：就学児89例について1カ月平均の休学日数をみると，白血病治療のための入，通院による休学が ALLで1.0日，ANLLで9.6日と ANLLでの休学日数が断然多い。通院以外の休学についても ALLが1.2日，ANLL 3.3日であり，その理由は嘔吐あるいは嘔気がある，元気がない，熱がある，食欲がないなどであった。上記

佐賀医科大学小児科（Department of Pediatrics, Saga Medical School）

の休学日数を合計すると1カ月平均ではALLで2.2日、ANLLで12.9日となる。

2) 入、通院の理由：入院あるいは通院の理由はALLの1カ月平均1.0日については、白血病治療と検査によるものであり、ANLLの9.6日については、そのうち8.0日が白血病治療、1.6日が感染症などの治療によるものであったが、これは厳密には区別できない例が多く、ある程度推定によるものが含まれる。

3) 通院以外の休学理由：大きく分けて、感染症と治療の副作用の2つになる。感染症としては上気道炎がもっとも多く、急性胃腸炎がこれについているが、その多くはウイルス感染によるものと考えられる。中耳炎の発症もかなりの例にみられた。

治療薬の副作用については、悪心、嘔吐がもっとも多く、そのほか頭痛、食欲低下、薬疹などの訴えがあった。これら副作用と治療薬との関係の分析を試みたが、投与薬剤が単剤でないために同定が困難であった。

4) 外来治療中の嘔吐：治療薬の副作用において、もっとも問題となる嘔吐の頻度について1カ月平均の日数を調べたところ、ALLで3.2日、ANLLで6.6日であった。薬剤と嘔吐の頻度に関係も分析が困難であり、また注射薬を見ただけで嘔吐する患児もあり心因性と考えられる例も含まれていた。

5) 外来治療中の発熱：外来治療中38度以上の発熱をきたした日数は1カ月平均ALLで0.9日、ANLLで3.2日であり、ANLLはALLの3倍以上であった。発熱の原因は大部分が感染症であり、短期間の場合はウイルス感染によるものであった。

5日以上続く発熱患者では入院治療が行われており、肺炎、敗血症が含まれていた。

6) 発熱時の白血球数：46例において記載があり、末梢白血球数 $1,000/\mu\text{l}$ 未満5例(11%)、 $1,000\sim 3,000$ が28例(61%)、 $3,000\sim 6,000$ が5例(11%)、 $6,000$ を超えるもの8例(17%)で、 $1,000\sim 3,000$ の例が大半を占めていた。白血球の分類については記載を求めなかったので明らかでない。

7) 学校体育への参加：学校行事で一番問題とされるのは体育への参加の有無である。今回の対象例についてみると、普通参加75例(84%)、一部参加10例(11%)、見学4例(5%)であった。一部参加の大部分は医師よりも保護者のすすめにより参加を制限している例が多かった。

8) 患者家族からの要望：外来日誌に患者側から主治医への要望を自由に記載してもらった。もっとも多かったのは薬の副作用についてもっと詳しく説明して欲しいというものであり、次いで検査結果の説明であった。年長児においてはとくに外来では保護者に説明できにくい面があると思われた。

予防接種の可否については定められた基準がなく、とくに水痘ワクチンの接種時期については施設間、さらには同じ施設でも主治医により差がみられた。虫歯をはじめとする歯の処置についても適切な指導が要求された。

学校行事への参加の可否についてはもう少しきめ細かい指示をして欲しいとの要望が多かった。考察) 小児白血病治療率の上昇とともに長期生存者における精神発達や運動機能の障害が問題となっている。¹⁾ 本研究班でも別のグループによっ

てその研究が実施されている。今回のわれわれの調査は治療中の白血病患者を対象として問題点を探った。

対象例を ALL と ANLL に分けたのは後者の方がより強力な化学療法が行われ、感染の合併も少ない点からであった。もっとも ALL でもスタンダードリスクかハイリスクかにより治療内容が異なるが、今回の調査では分析できなかった。

ANLL の 1 カ月平均休学日数が 12.9 日というのはいかにも多い。ANLL では初回治療の入院期間も長く、外来通院になっても 1/3 以上学校を休む状態は改善する必要があると思われる。休学の一因となっている嘔吐については有効な注射用鎮吐剤が発売中止になったこともあるが、坐剤で代用するなど考慮すべきであろう。

白血病患者の発熱については、Kosmidis ら²⁾が prospective に発熱の原因を追求したところ、白血病診断時の発熱の多くは原因が不明であるが、寛解導入と再燃時には細菌感染が増加し、寛解中の発熱は大部分がウイルス感染によるとしている。ウイルス感染の防止は困難であるが、細菌や pneumocystis carinii 肺炎の予防にはサルファ剤の合剤の投与が必要であろう。もっとも本調査ではこの予防投与と発熱に関して結論を出すには症例数が十分でなかった。真菌感染の予防には抗真菌剤の経口投与が有効との報告³⁾があるが今後の検討が必要であろう。

白血病患者における中耳炎の発症が対照より多いかどうかは詳細な検討が必要であるが、抗白血病剤投与による免疫機能低下の面からの解析も必要であろう。難聴や視力障害が少なからず見られるのはわれわれが報告⁴⁾しているが、薬剤との関

連も追求したい。

学校体育への参加は本調査では 84% が普通参加であったが、昨年度の長期生存例の調査による 91% よりは低かった。これは今回の対象が治療中の例であり当然であろう。予防接種については神谷らにより水痘ワクチンの接種基準が作られているが、他のワクチンについても基準作成が必要であろう。

文 献

- 1) Mulhern, R.K. et al : Social competence and behavioral adjustment of children who are long-term survivors of cancer. *Pediatrics*, 83 : 18-25, 1989.
- 2) Kosmidis, H.V. et al. : Infections in leukemic children: A prospective analysis. *J. Pediatr.* 96 : 814-819, 1980.
- 3) 宮田 曠ほか : 小児期 compromised host の発熱に対する治療—深在性真菌症の治療についての検討—小児内科. 20 : 1279-1285, 1988.
- 4) Hara, T. et al. : Childhood leukemia and lymphoma: Long-term sequelae in visual, auditory and vestibular function. *Acta Paediatr Jpn.* 28 : 209-213, 1986.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:10 施設における外来通院中の白血病患者 135 例につき血液外来日誌による日常生活の調査を行った。調査時年齢は3歳から18歳までで平均8歳であった。就学児における1ヵ月平均の休学日数は急性リンパ性白血病(ALL)で2.2日、非リンパ性(ANLL)で12.9日であった。外来治療中の嘔吐は1ヵ月平均ALLで3.2日、ANLLで6.6日であり、発熱はALLで0.9日、ANLLで3.2日、発熱時の白血球数は1,000~3,000がもっとも多かった。学校体育への普通参加例は84%であった。